

## 黄金の3日間

2023. 4. 10

「黄金の3日間」という言葉がある。学級開きに関わることである。誰が学級担任をしても、黄金の3日間になるわけではない。あらゆる努力や工夫をして、子どもたちにとっての黄金にしなければならない。

最初の3日間は、圧倒的に教員側にアドバンテージがある。子どもたちは、今度の先生はいったいどんな先生だろうと、大きな期待をしながら言うことを聞いてくれる。教員がやりたいことをやることのできる期間である。

ところが、この最初の3日間を何の工夫もなく、当たり前で過ごしてしまうと、後で大変なことになる。子どもたちの期待や希望は、あっという間に失望に変わる。それでも4月は何とかなるかもしれない。スタートダッシュに失敗したとしても、4月中に挽回できればいいのだが、実際に挽回している教員を見たことがない。すなわち、最初が全てなのである。最初で決まる。

これは、授業も同じである。中学校で言えば、「黄金の3時間」である。各教科の最初の3時間の授業で決まる。生徒たちは、今度の教科担任に評価を下す。それでも、4月中くらいは、期待感を失わずにやってくれるかもしれない。まだ、アドバンテージがある状態である。それも、5月の連休明けまでである。そこから、挽回していけばいいのだが、あまりそういう先生はいない。

1時間の授業も同じである。最初の導入で決まる。途中からよくなる授業など、ほとんど見ない。すばらしい授業には、見事な導入が付きものである。最初が違うのである。それだけに、授業は導入がむずかしい。

今日は、「黄金の3日間」の3日目にあたる。子どもたちは、どんな思いで学校に来てくれたのだろうか。明日も学校に来ることを楽しみにしているのだろうか。早くも期待感は失望感に変わりつつあるのだろうか。

最初の3日間で、打ち上げ花火を連発してもわるくはないが、花火はいずれ続かなくなる。それよりも、自分の持ち味を出し、楽しく、笑顔で、子どもたちと接することである。そして、大事なことは、話し方である。教員は話すことを生業としているが、そのことを意識している人は少ない。特に、中学校の先生は、話し方に対して無頓着すぎる。生徒が聞いてくれるのが当たり前だと思っている。少しは、生徒の身になって考えたほうがよい。

「黄金の3日間」にできるかどうかは、子どもたちをどうしたいか、子どもたちにどうなってほしいかという思いの強さにかかっているように思う。中学校の授業で言えば、どんな授業にしたいか、どんな生徒を育てたいかということになる。これがないと、せつかくの3日間は、黄金には輝かなくなる。

我が身を振り返る。教員1年目の初任者のとき、何もなかった。そこからスタートして、経験を重ねるごとに、だんだんと自分の思いというものができてきたように思う。「黄金の3時間」という言葉に出合ってから、学級開きや授業開きをさらに意識するようになった。本日までの3日間は、子どもたちにとっても先生方にとっても黄金のように光り輝くことを願っている。